

東大への“入学”を目指していた人工知能（AI）プロジェクトがありました。その時の識者の言葉が印象的です。「子どもが描いた猫らしくない絵でも、人間だとそれは猫だと分かる。だがAIでは猫と認識できない」

先週、東京で見た子どもに大人気の絵本作家の「エリックカール展」。その絵は緑色のライオン、オレンジ色の象などを描いていて不思議で楽しい。でもAIにとって、絵本の動物が何であるのか、理解は難しいでしょう。子どもが喜ぶようなことが、AIには難しいのかもしれませんが、僕は遠くない将来、AIが

働く人工知能、何をする僕

一筆



小児科医

駒木智

2017.6.29

ほとんどのことをしてくれられると思っています。AI医師、AI僧侶、もう何でもありでしょう。「やった！もう働かなくてもいいんだ」と喜んでしまいますが、次の心配があります。

仕事なしの世界で何をするのか？ 遊び、芸術活動や究極の暇つぶしでしょうか。もっとも僕は今の医師の仕事も、いい意味でもう暇つぶしといえる心持ちなのですが、AIが人間の知能を超えつつある現在、人の仕事や遊び、

つまり生き方について考えています。仏教哲学者の故鈴木大拙さんの言葉が心に残っていて、それを記してこの連載を終わります。

「我々^{われわれ}は自然の恵みによって、人間たる以上誰でも芸術家たることを許されている。芸術家といっても、画家とか音楽家、詩人という特殊な芸術家をいうのではない。“生きるということの芸術家”なのである」。皆さま、3カ月間お付き合いいただき、ありがとうございました。